

第七田郷土史研究会資料（九月二日）

お野田伝氏の「橋町の産窯窯」についての要点をまとめました

(一) 橋町産窯業の正史

1) 橋町産窯業のはじまり

(イ) 文祿慶長の役(文祿元年一五九二〜)慶長三年一五九八年まで(は豊臣秀吉の死によつて外征将兵が帰還することによって終つたが、諸将は帰る時「自領の産業育成のため韓国陶芸技術者を多数つれ帰り窯を開き、焼く物を焼かせた。武雄領主伯耆守家信も慶長四年多数の陶工をつれて帰り、武内若木朝日川登地区で開窯させた。これが武雄産窯業のはじまりである。

の橋町産窯業のはじまりは、東川登地区かめや地区の窯が領主の命令で移つて来た時からのはじまりだ。東川登地区のめやが領主のお狩り場であった。窯に火が入るとけものは忍びかま逃げ散るのでお狩りの成績が上がりな^いため移つたのである。橋地区の開窯年ははっきりしない。

ところが橋地区の窯では、白陶土の小物小形の産窯類が作られ、大産窯の製造は許されなかつた。大産窯が高価で利益も多く、陶工達は、大産窯製造を熱望していた。橋は産窯作りの優秀な原料粘土の産地であった。当所塩田新東山が大産窯の指定産地であった。

(ウ) この運動に挑戦したのが上野の山田本之十である。本之十は「はりの本之十」と云われ、い、あば水者であった。彼は塚崎藩庁に行き、「大産窯の製造については原料粘土の出工する橋地区の窯にも製造を許すべきである」と正論を述べ、交渉した。この必死の交渉が実を結び上野地区での大産窯製造が許可された。今、橋小学校旧校門のそばにある記念碑「軌範の碑」に偉い人達と共に本之十の名が刻まれている。

(二) 産窯の用途 (一) 産窯の特異点を生かす(大事に使うと耐用年数も長い)

(1) 三石産く四石産(大形)米麦貯蔵用、焼酎泡盛酢の醸造用等

(2) 三石く三石産、便産もどり産、染色産、産、味噌しょうゆ醸造用

(3) 小型水産その他各品

(四) 小型の櫓鉢、こね鉢、植木鉢、土管(農業土木用)等

※上野産は焼成温度が高いため、硬く阪神、神籠、韓国(さいしやう島)まで販路がある。

(三) 業者の経営の仕組みと作業内容……各仕事の専門の係り

① 窯方(窯元)……全体まわりの窯作りへの創意工夫

② 細工人……土管細工の職人

③ 荒任子……原料粘土の練り、釉薬かけ、細工人の助手

④ 窯焚き……焼成中の火焚き

⑤ 馬方……原料粘土を水田より運搬

⑥ 予算山馬方……燃料の薪を山から搬入する

⑦ 牛馬ひき……製成品運搬人

⑧ 金草手……登り窯の屋根板修理、細工小屋の葺屋根葺き

⑨ 灰買い……釉薬の原料となる木灰、藁灰の買い集め係

(四) 領主の窯業奨励

① 焼成燃料の確保……毎年の薪を確保する為、予算山と言って、毎年の必要薪を

確保する山を指定したこの山を予算山と呼んだ。木材の伐採、切さう之、割つて

乾燥、輪じめは指定を受けた人が山に入って仕事をした。

(五) 製品の輸送

① 鉄道が無かった時代……鳴瀬港、塩田港、伊万里港へ運搬、後は舟便で

② 鳴瀬までは道を大甕を掌でおしころがしく運んだこともあった

③ 後は鉄道、トラクタ便

(六) 橋の窯業の盛業のわけ

① 経営者の創意工夫と各係の緊密な連携 ② 原料粘土の優秀さ

③ 上野産土管KKの石炭窯

④ 小原産の煙突……東洋一(高温焼成 上品質)

(七) 橋町内の窯跡地

① 上野本登り窯(私化以前) ② 上野玉島窯(明治初期) ③ 芝原鳴瀬窯(明治六年)

④ 鳴瀬窯(藤巻)(明治十三年) ⑤ 白窯(明治三十年) ⑥ 上野新窯(明治三十年)

コクヨ ケイ-10

(7) 小野原の旧室(明治三十七年) (8) 小野原の形石門室(明治四十四年) (9) 上野石炭室(大正五年)
(10) 横濱室(明治甲午年) (11) 小野原土管室(昭和三十七年) (12) 小野原の石炭室(昭和三十七年)